

日本百街道紀行

街道とまちづくり

第34回

奥州街道

「みんなの思いや願いを結び 未来へとつながるまち」 「郡山」

憎々しいほどの「郡山」※1

郡山市は、福島県のほぼ中央に位置する中核市であり、首都圏から東北新幹線で約80分、福島空港まで車で約45分というアクセスのよさや鉄道や東北・磐越両自動車道が縦横に交差するなど、交通の



郡山市内五つのインターチェンジ

利便性が高く、「東北のクロスポイント」と称されている。

交通の要衝として、かつ、農業、工業、商業のバランスが取れた「経済首都」として、歴史作家司馬遼太郎が、著書「街道をゆく」で「憎々しい」と記すほど発展してきた。今日では、産総研福島再生可能エネルギー研究所やふくしま医療機器開発支援センターの立地により、「人」「モノ」「情報」に加え「知」の集積による「多機能化」が進んでいる。

平成31年1月13日には、インターチェンジとして24年ぶり市内五つ目となる郡山中央スマートインターチェンジ(IC)が開通した。この新たな交通結節点の誕生により、人流・物流の一層の活発化と円滑化が図られ、震災からの復

興の加速化ならびに地域の活性化が期待される。

縄文時代からの結節点「郡山」

郡山は、既に縄文時代には太平洋側と日本海側を結ぶ内陸交流の結節点であった。当時の遺跡からは、新潟のヒスイ製大珠や伊豆の黒曜石などが出土している。大和朝廷とのつながりを示す腕輪形石製品が出土した古墳時代前期の大安場古墳も築造されている。また、市内片平町には奈良の都との結びつきを示す采女伝説も残る。律令時代に入ると、当時の郡山地域一帯(安積

郡山市長(福島県)

品川萬里



郡)を治める郡衙(清水台遺跡)が置かれており、これが「郡山」の地名の由来とされる。

江戸時代には、幕府の命により「奥州街道(仙台松前道)」が新しく整備されたことで一段と繁栄した。(白河以北は諸藩が整備)



郡山宿錦絵

五街道の一つである「奥州街道」は、東北地方の多くの大名が通る街道であり、伊能忠敬も奥州街道測量で利用した。郡山宿では、参勤交代を行う諸大名の宿泊地、人馬継立の旅籠や町並み整備が行われ、宿場町としての機能が充実した。また、地理的条件のよさから、安積郡を

治めていた二本松藩の代官所や年貢を納める蔵が配置され、にぎわいある宿駅となった。郡山は、必然的に人やモノが集まる場所となり、奥州街道沿いの政治・経済の枢要となっていく。

「郡山」の未来を拓いた「一本の水路」

街道沿いの宿場町として発展してきた郡山に、明治時代に飛躍の転機が訪れる。水利が悪く荒涼とした原野であった安積平野を開墾し、豊富な水をたたえる猪苗代湖から水を引く、国直轄の農業水利事業第1号「国営安積開墾・安積疏水開さく事業」が行われ、「一本の水路」が完成したことである。

当事業は、全国と諸外国から人、モノ、技術が集まる交通の要衝としての立地条件に加え、厳しい環境の中でも夢を諦めなかった先人たちの開拓者精神により成し遂げられた。※2

文学に現れる「郡山」

日本最古の和歌集である万葉集には、郡山地方のものが3カ所5首登場する。

また、市の花「花かつみ」は、平

安時代から、貴族や文人から愛され、多くの歌に詠まれている。(古今和歌集などに収録)松尾芭蕉は、「花かつみ」を奥の細道行脚中に郡山で探したが、結局見つけられなかったというエピソードも残る。また、久米正雄や宮本百合子など、近代文学を代表する作家のほか、幕末には儒学者の安積良斎に続いて、宇宙物理学者の新城新蔵(第8代京都帝国大学総長)や世界的歴史学者の朝河貫一(イエール大学教授)など、時代を代表する偉人を輩出している。

さらに、柳田國男の「勢至道峠」には本市湖南町の記述が残る。これは数少ない福島県についての貴重な作品の一つである。

あすまち「郡山」の創生

現在は、人口減少・高齢社会などの迫りくる行政課題やSDGsの推進に対応するため、街道でつながる近隣14市町村とともにこおりやま広域圏を形成している。※3多様かつ高度な産業や13の研究機関が集積する当圏域は、ICTの活用などによるプラットフォーム構築を一つの大きな柱とし、デジタルトランスフォーメーションが

加速する時代における「e・経済圏郡山」的機能を果たすことが使命となつていく。また、圏域内のさまざまな分野で、住民や情報、研究成果が行き交う「知の結節点」としての相互補完的な関係を構築している。

新たな元号を迎える今後も、圏域内の「交易」「交通」「交信」を活性化させ、各市町村の自立的なまちづくりの理念実現に相互に資する「広め合う、高め合う、助け合う」

一口メモ

白河から三厩を八十九次でつなぐ一大幹線

奥州街道は、奥州白河を起点に現在の青森県三厩に至る八十九次の街道で、羽州街道と並ぶ近世奥州の幹道である。古代の東山道や中世の奥大道の道筋を踏襲して各宿駅の町割りや道が確定され、近世初期に街道沿いの藩により整備された。

整備に当たっては、大名の参勤交代路である幹道の整備が優先され、次に領内道の整備が行われた。奥州街道を参勤交代路として利用した松前・奥羽の大名は、文政5年

関係を築き、持続可能な圏域づくりを進める。本市まちなぎりの将来都市構想である「みんなの想いや願いを結び、未来へつながるまち」郡山」を創生していく。

※1 司馬遼太郎 著書「街道をゆく 白河・会津のみち、赤坂散歩」で、郡山を「他からみれば憎らしいほどに発展し、東北の雄都」と表現。
 ※2 安積疏水にまつわる歴史ストーリー「未来を拓いた「一本の水路」」は日本遺産に認定。
 ※3 平成31年1月23日に協約締結。

奥州街道



(1822年)当時、29藩であった。これは中山道に匹敵する数である。